911.3
サ
上

晉真角序

福岡藩文

諧謔乃集つくる事古今
にすくれたる此道におこりて起
き時なれや幻術の事一ぢ
してうれしかりし魂を入さま
をゆめにまぎれこそに似たる
面白く久しく世にもてはやされ
ものしくなりてあ愛に

を志し立德ハ以て及く
ひんをこゝ治面きゝ為な
こたり彼為り上人に骨可
て人を作りまして禪い純
為る留を治やうになん結る
とゝさ純なる人まい成て清道
ゝを立の禪のまゝ純さ為は
反魂乃法にまゝうこうよ結ふ

成ぬまゝたまゝ為に入ゝ
ゝアイウエオよくひきく
いうゝん吟禪をおめ面
ゝ只祈請よ魂に入ゝ神
ゝこうして我前行脚乃ゝ
伊賀越ゝ為る山中ゝく
猿ゝ小義と着せて祈請
乃神を入ゝまゝ分純た

を志すしむ立德ハいふに及ば
ぬ人をこそ治国きこゆなり
こたり彼西の上人の骨可
て人を作まして禪い玉
多留笛を吹やうになん侍る
とゝまれ生る人と成て法道
吹竜五の禪の玉秘さ東は
反魂乃法ゝ玉ゝろうこゝ結ぶ

反魂をしたまふるゝ入きゝ
ゝアイウエオよくひらきく
ゝ乃形ん除禪を如通
ゝ只能諸ゝ魂ゝ入ゝ秘
ゝこうして我前行脚乃ゝ
伊賀越ゝ者ゝ山中ゝく

[illegible]断腸の[illegible]を[illegible]
[illegible]あるて懼るへきの
術なりこれを元らして此
集をつくりて猿蓑の名
付[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
書

猿蓑集巻之一

冬

初しぐれ猿も小蓑をほしげなり　芭蕉

あぢきなや峯の小松も末かけて　其角

時雨やうなるものを[illegible]　千那

幾人かしぐれ[illegible]　丈艸

[illegible]の[illegible]　正秀

[illegible]　史邦

舟人よめるまとをとりて呼ぶ　尚白

伊賀の境よりうつる

なつかしや奈良の隣の一時雨　曾良

呼ぶこゑや畠つむ屋の窓のうち　元水

ちらで竹間の星やかしこ死　大津　乙刀

魚まきに星の光や小夜時雨　羽紅

新田の稲穀焼るしるまぶ　膳所　昌房

いろいろや神の呼ぶ声帰り咲　去来

とうとう新しやの北辰星のあ　伊賀　百歳

一ふしの動く地なるを新蛍　野水

流るて

ふるものとおもふ舟の中　其角

帰の船うれしさ長き延切し　同

禅寺に雲の高葉や神無月　元水

百舌鳥のわるる松の枝より十月　嵐蘭

ふるしや類焼病む人の影　芭蕉

寂しき景色なりけり

手ちらして景色を愛するかな

[illegible]　　元北

[illegible]

[illegible]　伊賀　太方

[illegible]　膳所　裾道

[illegible]　越人

[illegible]　伊賀　猿雖

[illegible]　元北

[illegible]

雜水の[illegible]　其角

[illegible]　伊賀　東来

草津

[illegible]　尚白

[illegible]　珎碩

霜月朔日

[illegible]　伊賀　良品

[illegible]　羽前酒田　不王

心えがたき一句妙なり
花と妙なり
旅を思ひ出して妙なり
あら〳〵して妙なり
妙なり

今は世をたのむけしきや冬の蜂　尾張 旦藁
尾頭のこゝろもとなき海鼠哉　去来
一〳〵さむき酒や鍋千茶　伊賀 探丸
ミらゝるに多賀城の寒さ哉　尚白
茶湯とてつめたき日にも稽古哉　江戸 亀翁
炭竈に手負の猪の倒けり　凡兆
住つかぬ旅のこゝろや置火燵　芭蕉
寝ごゝろや火燵蒲團のさめぬ内　其角

門前の小家もあそぶ冬至哉　凡兆
木兎やおもひ切たる昼の面　尾張 荻境
みゝづくは眠る処をさゝれけり　伊賀 半残

貧交

まじはりは紙子の切を譲りけり　丈艸
浦風や巴をくづすむら鵆　曽良
あら礒やはしり馴たる友鵆　去来
狼のあと踏消すや濱千鳥　史邦

背門に乃入江のほるゝ雪ふれ　文州
いかなる雪とまつまて鳴千鳥　千那
矢田の野や浦のゝ雲れ鳴千鳥　元北
筏さす人とゝる跡や鷺の羽　本節
水鳥とゝんて寒き魚の小鳥哉　文州
ゝゝも寝入ゝゝ余吾の海　路通
死まて探ゝん鷹ゝゝ　貝藻
襟まて首引入ゝ冬ゝ月　扶風

天木戸や鎖のゝゝれて冬ゝ月　其角
かゝゝゝゝ蒲団ゝゝゝゝの猿　長崎　暮年
見やるゝゝ旅人ゝゝ石部山　大津尼　智月
翁の御ゝゝゝゝ食をゝゝ
ゝる記あり略ゝ
首ゝゝてゝゝゝゝゝゝ食　義濃　竹戸

題竹戸之食

ゝゝゝ我ゝゝゝゝゝ紙食　曽良
魚のゝゝ粉乃やゝゝゝ　探丸

志ひのさゝ敷珠も埋す網代雪　文艸

博白砂よ候す

勝つさよ叫こまちの居る霞哉　史邦

梭鵜の蒸氏霞よ狂ふあり　野童

鶺鴒の鳴うつこけす霞哉　伊賀　不蜂

呼こゝ朝霧哉ゝ鶯あり　凡兆

こゝれ海ゝ朝飯の蛙哉　膳所　畫好

ゝつ雪や四よ居られ人の雑　其角

初雪よ鶯部屋のうく軒朝　史邦

雪や竹の音ゝ吹ゝ雪哉　羽紅

ゝゝ雪ゝ凡兆の寒ゝ　探丸

下京や雪つむよ夜ゝ面　凡兆

ゝゝ川一筋や雪の原　同

信濃路をゝゝ

雪ゝ穂屋ゝ蔦の刈跡　芭蕉

草庵の留ゝ紙ゝ

出川の清水数珠も玉も浮綱貫　文仲

清白砂と候す

勝つるよりかちまちの居る霞哉　史郎

樓鶴の巣に霞の狂ふあり　野童

鶺鴒の鳴くこゑすす霞哉　伊賀　不蜂

呼ぶと鶯賣ふこゑあり　九兆

ちりし海苔の朝飯の出る迄　膳所　畫好

ちつ雪や門に居ちりし人の跡　其角

裏表ハ紙屋もあけと菴代雪　其角

雪代日ハ竹の子笠うはかるる　尾張羽笠

酒よりも健ハ雪ハ結ふ　長崎卯七

ひけらけてもや雪ぬのてまくら　去来

青亜追悼

乳のみ子に世を渡しる師走哉　尚白

うき鼠も雪也の慶を喜代内　芭蕉

鉢ゝ紀蟻ハ影ゝ似ぬ雪ゝ　乙刀

一月ハ雪ゝ来ぬ雪ゝ　文州

住吉奉納

夜神ゝや鼻ハ白ゝ雨の内　其角

節季偏ゝ人のうむ人ゝ　伊賀須琢

家ゝやうちいやまゝ掛　同祐甫

乙刀の新宅ゝて

人ゝ家をうゝ世ゝ家ハ年忘　芭蕉

弱法師ゝ家門ゆゝ世餅のれ　其角

歳の夜や曾根文を守り尓手枕　長和
ゝす望月ゝ〻ゝ行ゝゝの雪　去来
ゝきて切手ゝゝけゝ伊勢ゝの　同
大ゝゝゝ手ゝ手ゝゝゝゝゝゝ　羽紅
やゝゝゝゝゝゝゝゝゝ嵐の雪　其角
い孫ゝゝゝゝゝゝゝ年ゝ暮　路通
手の飛破ゝ袴ゝ幾ゝゝ　松風

猿蓑集巻之二

夏

有明の面影すゝゝゝゝゝ　其角
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ時鳥　素堂
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　芭蕉
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　尚白
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　凡兆
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ時鳥　智月

蜀魂なくや木の芽花角櫓　史邦

入れかしの中やはるばる　羽紅

はるばるの波ゆかしのわるれ　文艸

んなるべき代官屋やはるばる　去来

こひ死も我塚ぞかなしき　遊女奥州

たがひ一見の所もうれや

ゆかりの色ぞあらわれる

去鴉や藤よりそをうれはるばる　曾良

すきまの色ぞかしかせよかんこう　芭蕉

旅館庭せまく色草をうえす

[illegible]　膳所　曲水

四月八日詣慈母墓

あかるうしてうくるうるる　其角

[illegible]　江戸　全峯

別僧

ちるさくらのこやさくらの来嚢花　越人

なるものるるるのるのの　珎碩

[illegible]

似合しまけしのこゝやはなの里　亡人 杜國

きこえきき匂ひゆきしけしの玉　嵐蘭

井戸ばたの[illegible]　杜國

起出てゆきまきれなる　本蛾

夜の間乃

起くるのゝ[illegible]　仙化

題去来之嵯峨落柿舎句

[illegible]　元水

破垣やわらこ屏子ばかりの道　曽良

南都旅店

誹のこゝろなるべし乃園地相　千那

洗濯やきあるこゝろ迄伝の玉　尾張 薄芝

豊國よて

竹のよ力を[illegible]　凡兆

[illegible]　去来

たけのこや[illegible]　芭蕉

猪よ吹うへさらさらと　正秀

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢の夏草　芭蕉

見せ消や施餓鬼を縋一つ　越人

五月三日

[illegible]て

面白き蓮と並べし菖蒲哉　其角

粽結ふかたもとふるもむ頭髪　芭蕉

隈篠の庚茶ふるひ餅粽　江戸　岩翁

さびさびと客人やとまりあり　尚白

五月六日大坂にて死の遠忌を吊ひし

大坂や乃ぬけ殻夏乃わすれ　伊賀　蟬吟

奥羽に旅して

夏草や兵どもが夢の跡　芭蕉

這出よかひ屋の下の蟬の殻　同

此境にしばらくとどまるこの身哉

かぶとぬぎ角ぬけ法師石　同

五月雨や家ゝ掛てあるこゝろ　凡兆

ひ孫共に味なき宵やわりもの　未節

るさの謂沢庵ありさつゝ雨　史邦

奥羽名取の郡に入る中ゝ宮の
の隙ハ二ツ三ツ家作りまた
道ゝ一里ばかり左り乃方
笠島といふ所に出るとゆ
ゆ分つゝきるあり
なくなるゝ

笠島やいつこ五月のぬかるみ道　芭蕉

大和紀伊のこゝろにて
て住家の形ゝ
て

すゝ
紙のゝに書つけ侍る

つくゝもたゝてゝ坂やゝ　去来

髪剃や一夜ゝ今情ゝ　凡兆

日の道や葵ゝ月あゝ　芭蕉

徒地ゝ若ゝ　羽紅

七十余の老醫ゝ
ゝ
にゝ
いゝ
るゝ

なる年よりとしとかく
ゆるさるまこと

六尺も力おとろへや五月あめ　其角

百姓を麦と取つく茶摘哉　去来

ちつそくや茶山つよい夫婦つれ　正秀

つみ合子を仏ぬけや麦畑　居所 游刀

孫を愛して

麦畑家にてやらん雨蛙　智月

麦出して鯉迄給る山の郡　江戸 花紅

寺門の閑さて

風流のしらべや奥の田植うた　芭蕉

出羽の三山にて

眉掃を面影にして紅粉の玉　同

法隆寺開帳
南無佛のたまを拝す

虎袴のしつまるなつく花粉の玉　千那

田の畝に豆つるひけり蛍くれ　伊賀 一乎

膳所曲水之樓にて

螢火や吹とばされて草の宿　去来

野田乃螢二句

闇の夜や子を法師とや螢とも　凡兆

ほうたるや船頭酔て居ねつれ　芭蕉

三熊野へ詣る時

螢火やこゝ迄来ても人思尾谷　長崎　田上尼

あれらを捨て行かねばならぬ　尚白

草むしりや百合ハ中ごろの頃　半残

病後

やつれやかゝらぬ百合の茎　大坂　何処

すゝ門や蚊ゐぬ百合の花　乙刀

蟻蚊帳を作りて

子やなくん其子の母を蚊の吟と　山風園

餞別

ちさとやや蚊屋もとゝのふ旅の宿　膳所　里東

うゝ蚊ハ人まつれゝ

糸竹する法者まつれむけて

[illegible]　其角
[illegible]　文艸
[illegible]　嵐雪
[illegible]　膳所　探志
[illegible]　芭蕉
[illegible]　伊賀　槐市
[illegible]　元水
[illegible]　千那

白雨や鐘[illegible]日[illegible]多　史邦

素堂之蓮池邊

白蓮や蓮一枝の[illegible]　嵐蘭
日焼田や鳴[illegible]鳴[illegible]蛙　乙刀
日乃暑さ鹽の[illegible]蠟[illegible]　元水
水[illegible]鼻つまりの[illegible]　同
目の暑やこりかたく暑さ半[illegible]　正秀
[illegible]暑[illegible]翻[illegible]髮の[illegible]　木節

[illegible]　野童

[illegible]　羽紅

青草に混入おもんあいさるる　巴山（江戸）

千子の[illegible]

[illegible]

[illegible]　芭蕉

水[illegible]月や朝[illegible]　嵐蘭

[illegible]　宗歌

[illegible]　元雅

[illegible]　千那

月鋒や四方の[illegible]　曾良

[illegible]　去来

[illegible]

[illegible]　大坂

[illegible]　之道

猿蓑集巻之三

妹

[illegible]

此句東武[illegible]

不知讀人

素堂の

かけうつもあけ初る歟や秋の風　杉風

芭蕉庵の何よりおもしろき妹の風　路通

人よ似て猿の手を組秋の夜　珠碩

加賀乃全昌寺に宿す

終夜秋風きくや蟋蟀の　曾良

笈の底や蛙の寝ぬ程を炉の風　江戸　山川

あさ顔や朝露負て秋の雨　凡兆

しら露や殉死の門出の花あるじ　去来

大比叡やしぐるゝ日も霞の海　野童

三条ちらして踏こゝろみや相の西　凡兆

文月や六日もまだの夜の雨　芭蕉

合歓の木に花咲かゝる頃　同

七夕やあまのいろはの天の川　伊賀小波　杜若

こゝやこの行かも知らぬ相撲取　去来

朝ぼらけ霧に眠るや鳥の声　伊賀　風麥

蓮や浮世の夢に咲にけり　膳所　及肩

秋の海法の色よりなほ悲し　嵐蘭

手枕に聞てゝ見る木槿哉　秋風

高松に秋の月ゆく柏哉　千那

まくらにも瀬のなる音や旅廬雨り　史邦

そよ〳〵や藪の内より初あらし　旦藁

秋風やとても芒はうごくはず　三川　子尹

迷ひ子の親のこゝろやすゝき原　羽紅

八瀬おはらに遊吟して柴うりの文つくる序に

まねき〳〵枴の先の薄かな　凡兆

つくしよりかへりけるにひみといふ山にて卯七に別て

君が手もまじる成べし花薄　去来

草刈よそれが思ひか萩の露　平田　李由

元禄二年翁に供せられてみちのくより三越路にかゝり行脚しけるにかゞの国にてわづらひ侍りていせまで先達けるとて

いづくにかたふれ臥とも萩の原　曽良

桐の木にうづら鳴なる塀の内　芭蕉

百舌鳥なくや入日さし込女松原　凡兆

初層よもの縫とる手まくらかな　亡人　落梧

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雲母よて

病屋に行さむよ雨て蹈ひ　芭蕉

はたの風さ小海老よまるい　同

加賀の小雪こ云ひ四乃
神社の宝物ゝて云ひ
う蔦う草乃ゝて同
錦のゝしゝ雲さ和な
ゝものわう塵よ塗て

むさんやしは甲のゝ北きわくす　芭蕉

菜畑や二ゝ乃ゝ中の蝶ゝ　尚白

ゝゝゝゝ

いゝゝゝゝゝゝゝゝ

菜月や名残よ落ゝ人ゝゝん　元人　千子

こゝ月に蓋のあゝまゝ行ゝ　之道

粟稈ゝ同ゝ度ゝゝ月よ　半残

月ゝん世ん伏見の郷乃粉部　去来

翁ゝ茅舎よ有て

行ゝゝゝ松竹ゝよ雨月迫　伊賀　土芳

堅田にて

病鴈の夜さむに落て旅ね哉　芭蕉

海士の屋は小海老にまじるいとゞ哉　同

加賀への小松と云處多田乃神社の宝物として実盛が菊から草乃かふと同しく錦のきれをさむ遠き事なからまのあたり憐におぼえて

むざんやな甲の下のきりぎりす　芭蕉

桑畠や二葉ふみ中の虫飼ひ　尚白

よゝはおや聲よ耳に鳴夜は月よ　風麦

いせにまゐりしてかへる時

葉月や名残よ渡る人さあん　亡人　千子

三ケ月に蠶のあるまだ人なきわ　之道

粟稗と目出度なりぬ霜月よ　半残

月見せん伏見の城の捨郭　去来

翁を茅舎に宿して

おもしろう松笠もえよ薄月夜　伊賀　土芳

加茂に詣でて涙の時雨かのふるかのやうの神垣をえつてうつしやう

月就や拍子もとる膝の上　史邦

友延の六條よりうつる月

影をうつしたる遠浦の朝月夜　伊賀　卓袋

京鹿毛　乙刀

月の相手や三日月一人　元旭

なりもてこしらへるあの月の毎　尚白

向の能をやる月ばんる　春風　昌良

元禄二年つるが橋

月をうつして氣比の明神

宿をしらせる古例を

月清し遊ひのしてる小乃上　芭蕉

仲秋の望猶子を送葬て

うつる夜の月もあんなうらみを送送　玉来

明月やあまをさそはん茶はあらう　膳所　昌房

月見まほしき人の宿はかりける　羽紀

僧正のいまだ小屋住なりける　尚白

初瀬や鳴らの浜の冬桜　凡兆

一戸や衣もやまぬこまむしの人　去来

秤の棹ぬる迄しるこの香　越人

濁糟やかつぎ喰ふ荒鳥　正秀

あやまりてきくうぐひすの鏡かな　嵐蘭

一鳥不鳴山更幽

物の音ひとつ残して秋の山　凡兆

しつまりかへる人ぞ雪の秋　曽良

旅枕庵のつまとや石軒端下　江戸　千里

鳩ぬくや濁酒の蕎麦湯　珎碩

上ひかせて下るこそ嬉しの大　凡兆

鱠釣ひたる鯉つり　半残

わかの間のふるまひ高く蔦紅葉　尚白

菓を切る踏まれぬ苔の苔の上　其角

言上まで鶯の明日や立ちまれ　琢碩

うゑのゆもくさ稲ふる秋　土芳

稲うゑ母よ出迎ひあるべし　元水

自題落柿舎

柿の木柿ちりあとし　去来

ちりぬるやうつ柿の下の葉　賀茂小松　塵生

肌さむし竹切山のすそ葉　元水

神田秀

されハこそ山れの柿の柿の柿の
柿田秀の敷うつ川音　野定
柿ちりあとあつまるかな

花すゝき大石流をまつらん　嵐雪

山の秋の四五日弱るすゝき　文竹

立出る秋の夕やけ月　元水

世の中ハ鶺鴒の尾乃ひろ　同

涼奥に鶴よりとゝ山の雲　荷分

猿蓑集巻之四

春

梅咲て人の恋乃悔をあり　露沾

上鶴の山荘よりまゐらせ候しまゝ

梅ゝ香や山路猟入る犬ぢかり　去来

しゝゐの香や六入黒牛の角　加賀句空

庭興

梅ゝ香や水利しる流す谷の眞　土芳

[illegible]つ塚原曙覧　半残

梅ゝ香や酒のくもひのあけしを　膳所　蟬角

しゐの木やけ一筋を路のたり　其角

子良館の梅ゝ

庵子良館の一ゝと所梅の木　芭蕉

痩藪や作りたる我の軒の梅　千那

庚捨て白梅ゝ也移れ　元北

日當ゝ梅咲ゝや屠半房　膳所　支考

暗香浮動月黄昏

入相の梅ゝなり巡りきれ　風麦

武江よりもとしゝ旅亭の

残夢

寝ゝゝき窓の細月や窗の梅　乙刃

[illegible]

[illegible]

夢さめて又一句しや月ほろ梅　嵐蘭

百八のつゐて迷いや鬼のもの　其角

ひとり寝も能宿とらん初月　去来

野留や屠蘇の酔ひく搗ゑ来　史邦

くつ市や雪ふ満まる家私　嵐蘭

雪月花よりなりのとこゝ　如行

憶翁之客中

裾ゆて草をつゝまん早梅　嵐雪

つゝまれて踏分かねる路通　路通

七種や踏よろめく朝ゝす　其角

歌書ふし鶏のもの根芹哉　丈艸

うすしやわけるゝ芹の水　其角

豚ふ出ぬ去て月あるれ　同

鶏ゝきこゑ鶏ハ鶏なのわ　去来

鶯の声踏ふす垣穂ゝれ　伊賀一桐

[illegible]

江戸 溪石

其角

[illegible]

凡兆

伊賀 魚日

[illegible]

探丸

[illegible]

江戸 卜宅

同 遠水

尚白

[illegible]

伊賀 一啖

同 未白

[illegible]

揚水

[illegible]

芭蕉

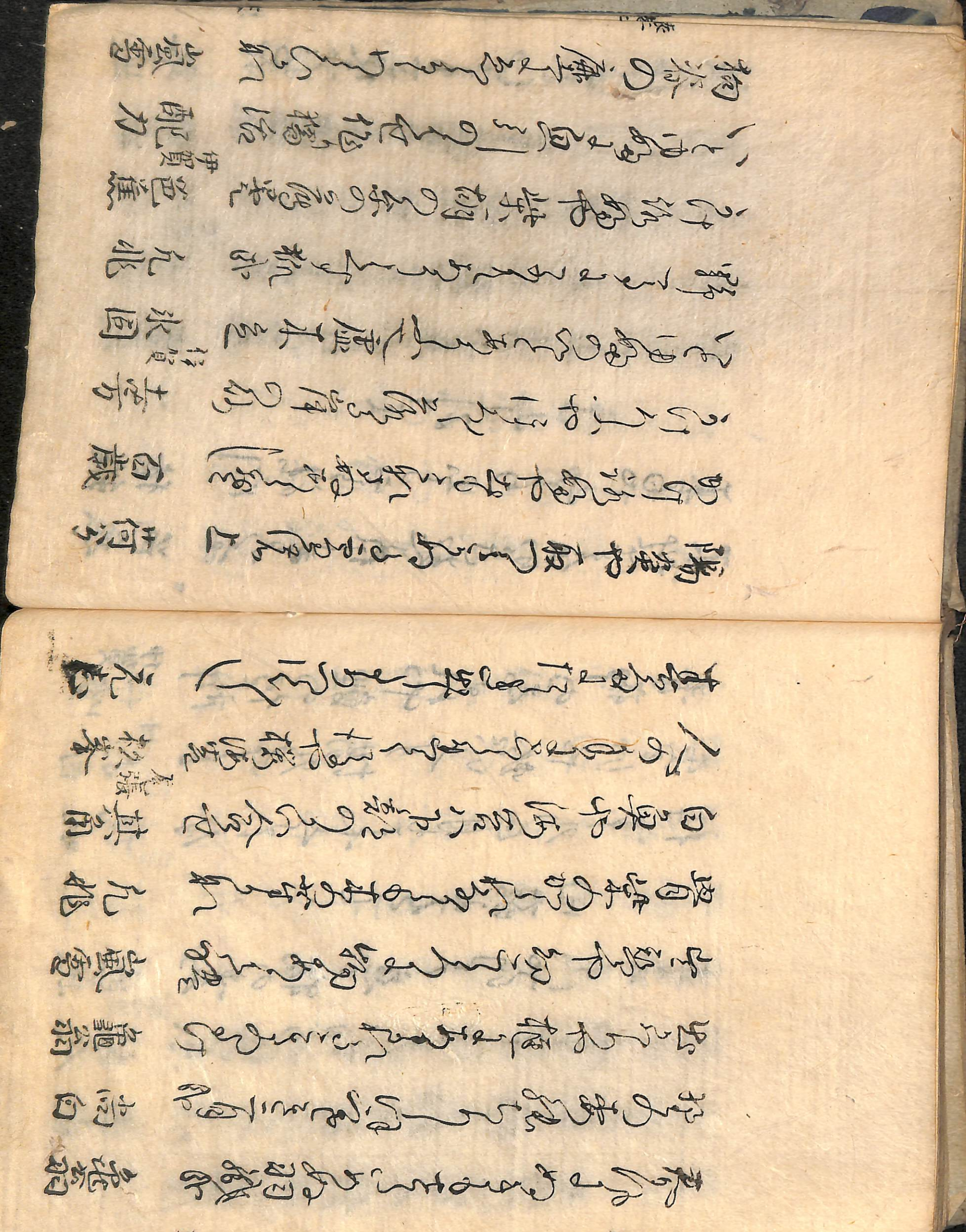
[illegible]

越人

[illegible]

去来

露沾公にて餘寒の當座



彼岸まへとむさも一夜二夜の程　路通

うしろ山や常ぜのあらしに涅槃像　野水

元禄三庚午歳　丸兆

蓮乃かすかなる道

伊賀　沢雉

立さつる今や紀の国の山の居

春雨や屋根の小草小菊咲ぬ　嵐雪

高山を外して

高山やしらぬ世界の門　猿雖

不性さを見かさ起る春雨　芭蕉

春雨下田蓑のうしろ姿　史邦

ちらちらのあるや軒ばの花　羽紅

泥棒や西瓜の皮つるん　史邦

野ごうるまの行や虫の糞　昌房

振袖や下屋にかくる去年の雛　去来

春風やさらされ雛の紙衣の后　伊賀　萩子

桃柳くらあらくやをんなのすがた　羽紅

うくすの表ばんのうしろ姿　三川　烏巣

里人の晴れ顔なる田螺哉　嵐雨

蝶のまぎれ一こ飛ぶよりあはれ　半残

帝鳥切て白根の嶽とひ来る　加賀山中　桃妖

いうのたりこてるもすもや潦　伊賀　園風

月の影やこそ〳〵ぬしの親すめ　琢磨

花の盛ぬむ春のすゑや縁の先　土芳

閑の色や巣かもこ〳〵てあ〳〵衛　芭蕉

越ら飛深〳〵ゆくて籠の

つるのあやうきところ遊

まま山路をとゝまるの

鶯や巣の梓の枯枝より見へぬ　元北

うすくらうんこる雲の〳〵　伊賀　石口

子や徐ん餘りをとなの言あるより　秋風

ひくらの〳〵中代掬ぶや雑あゝ　芭蕉

芭蕉庵のふるまを訪

菖蒲小鍋作〳〵あるやれ　曲水

木瓜筋張〳〵てゐる〳〵拾ふ　江戸　山店

畫讃

山吹や宇治の焙炉の匂ふ時　芭蕉

白玉の露よきハつく椿かれ　車来

[illegible]

笋もそだてゝ青やちり椿　羽紅

蝸牛打ふせてある都　津國山本 坂上氏

うぐひすの笠おとしたる椿哉　芭蕉

ちるはなを追てはきけかな　伊賀 利雪

東叡山にあそぶ

小坊主や松にかくれて山ざくら　其角

一枝はをらぬもわろし山ざくら　尚白

鶏の声もきこゆるやま桜　凡兆

真先に見し枝ならんちる桜　丈艸

有明のはつはつに咲遅ざくら　史邦

出家よもつきをならふ花の雪　千那

高城の跡をとゝのる

枯つゝ[illegible]あるは物ゝ神の顔へ　芭蕉

いつの国花咲の広ハうのゝ
あれ乃八重桜の新よ酔
らきたるゝと云伝へ[illegible]
ゝ

一里ハ[illegible]れ花守の[illegible]孫ゝ　同

元文の墓東武谷中にあり
と歳[illegible]
[illegible]墓の[illegible]桜
[illegible]
[illegible]
他の墓[illegible]

まゝ[illegible]や花吸ふ野の往還り　園風

知人よ[illegible]と[illegible]れ　去来

ある僧の[illegible]の[illegible]れ　凡兆

浪人の[illegible]

嵐を[illegible]の夜あれ[illegible]　半残

[illegible]れ[illegible]　伊賀　長眉

[illegible]れも奥[illegible]

[illegible]

大峯[illegible]奥乃[illegible]の栄　曽良

道灌山よりのぼる

[illegible]や[illegible]の[illegible]を[illegible]　蘭

[illegible]の[illegible]

探子に[illegible]る[illegible]　羽紅

庚辛の歳家を焼く

[illegible]　加賀　北枝

[illegible]や加藍の[illegible]　凡兆

[illegible]　江戸　普船

大和路

[illegible]　芭蕉

[illegible]や躑躅[illegible]　探尤

[illegible]　智月

[illegible]　山川

[illegible]　伊賀　戎之

木曽塚

[illegible]の[illegible]　乙刀

昭和36年3月14日
東京教育大学
図書
6/199